

た じ ま
田 島 遺 跡

市道田島桶田線道路改良工事に先立つ緊急発掘調査報告書

1997

掛川市教育委員会

田島遺跡

市道田島桶田線道路改良工事に先立つ緊急発掘調査報告書

1997

掛川市教育委員会

例 言

1. 本書は、静岡県掛川市上内田1-1外における掛川市市道田島桶田線道路改良工事に先立ち、平成7年1月30日より同年2月11日（第1次）、平成7年4月17日より同年4月28日（第2次）、平成8年11月11日より同年3月31日（第3次）までの2ヶ年にかけて実施した田島遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 今回の調査は、「掛川市市道田島桶田線道路改良工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査事業」として、掛川市役所土木課の委託により、掛川市教育委員会が受託し調査を実施した。
3. 現地の発掘調査は、第1・2次調査を掛川市教育委員会の大熊茂広が、第3次調査を掛川市教育委員会の村松弘規が担当した。
4. 現地作業ならびに整理作業では、次の方々の参加を得ている。
木村治郎 長谷川勇次郎 大庭虎男 鈴木欣平 鈴木静江 鈴木はつ子 鈴木敏子 弓桁きよ
弓桁好平 本樫公太郎 松浦弘司 渥美きよ子 佐々木あい子 佐々木まつ江 榛葉豊子
戸塚智美 中山明美 清光真由美
5. 本書の作成にあたり、次の方々から御教示・御協力を得ている。
向坂鋼二、岩瀬彰利、後藤和風
5. 本書の執筆・編集は大熊と村松が行なった。執筆は目次に示したとおりである。
6. 発掘調査業務は、第1次調査は掛川市教育委員会教育長大西珠枝・社会教育課長榛葉稔・社会教育課文化係長澤村久雄のもとに、第2次調査は掛川市教育委員会教育長大西珠枝・社会教育課長清水功・社会教育課文化係長澤村久雄のもとに、第3次調査は掛川市教育委員会教育長小松弥生・社会教育課長清水功・文化係長宮浦直己のもとに社会教育課が所管した。
7. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本文、挿図中で使用した地点名は現地調査時のままである。
2. 挿図における方位は、磁北を示す。
3. 本書で使用した遺構名称は、S Pが柱穴及び小穴を、S Dが溝状遺構を、S Xが正確不明の遺構を表す。
4. 遺物の番号は、挿図と写真図版と同一である。

目 次

例 言
凡 例

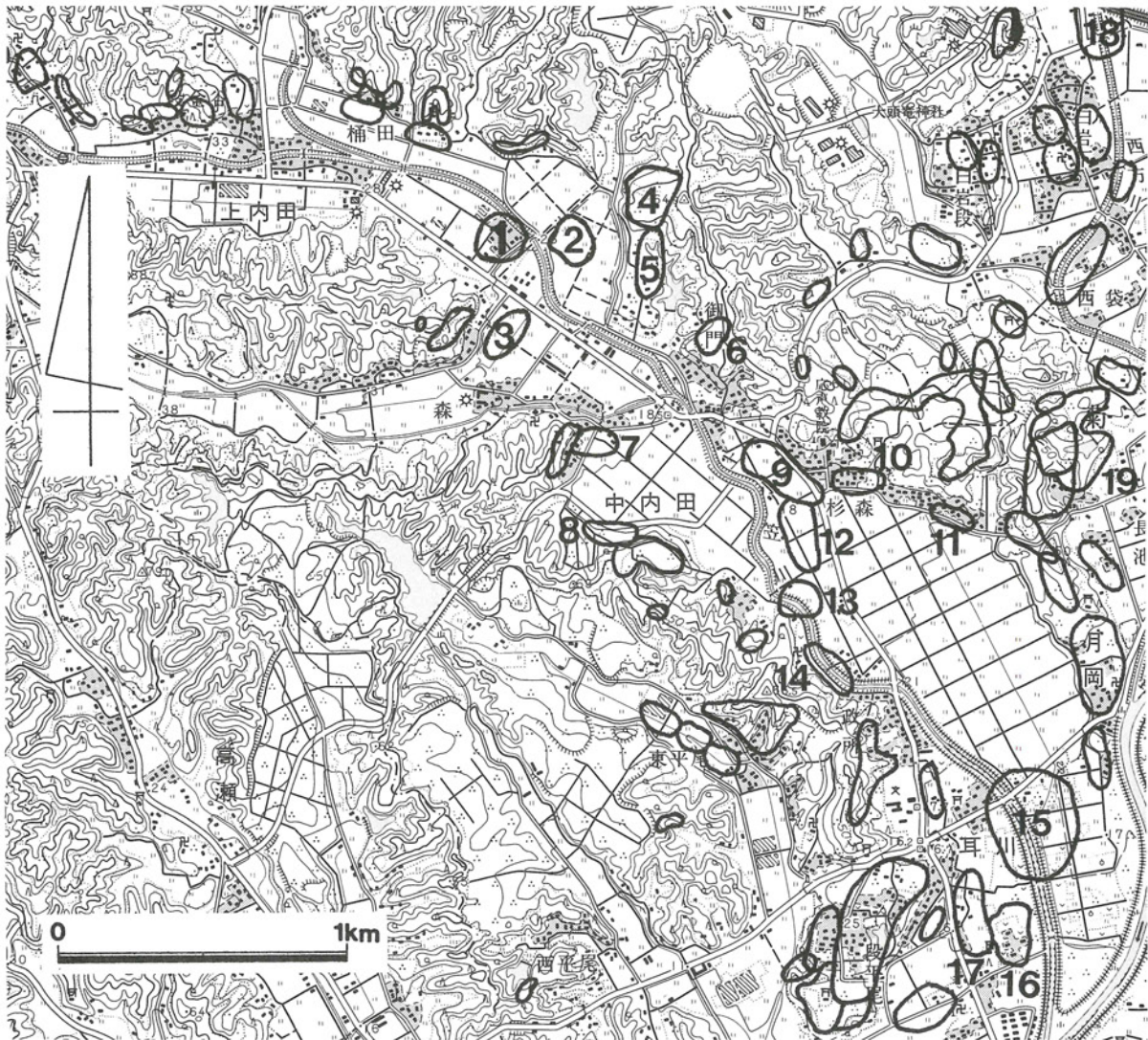
I	発掘調査と遺跡の概要	
1.	調査に至る経過と調査の目的	2
2.	調査の方法と経過	2
3.	遺跡をめぐる環境	5
II	調査の内容	
1.	遺 構	10
2.	遺 物	17
III	ま と め	23

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺遺跡分布図	1
第2図	遺跡周辺地形図	4
第3図	調査区全体図	6
第4図	遺構全体図（第1調査区）	7
第5図	遺構全体図（第2・3調査区）	8
第6図	遺構全体図（第4調査区）	9
第7図	第1区S X01実測図	10
第8図	第1区第2面S P集中域実測図	11
第9図	第2区遺構詳細実測図	13
第10図	第3区S X01実測図	14
第11図	〃 S X02・03実測図	15
第12図	〃 S X05実測図	16
第13図	遺物実測図（1）	17
第14図	遺物実測図（2）	19
第15図	遺物実測図（3）	20

図版目次

- 図版 1 第 1 調査区第 1 面遺構完掘状況（北西から）
- 図版 2 第 1 調査区第 2 面遺構完掘状況（南西から）
- 図版 3 第 2 調査区遺構完掘状況（南東から）
- 図版 4 第 3 調査区完掘状況（南東から）
- 図版 5 第 3 調査区完掘状況（南東から）
- 図版 6 第 4 調査区完掘状況（北東から）
- 図版 7 (上) 田島遺跡遠景（北西から）
(中) 重機掘削風景（第 3 調査区）
(下) 作業風景（第 1 調査区）
- 図版 8 (上) 第 1 調査区 S X 01 完掘状況（北西から）
(中) 第 1 調査区第 2 面ピット完掘状況（北西から）
(下) 第 2 調査区ピット完掘状況 1（南西から）
- 図版 9 (上) 第 2 調査区ピット完掘状況 2（南西から）
(中) 第 4 調査区 S X 02 土器出土状況（北西から）
(下) 第 4 調査区 S X 02 土器出土状況（微細）
- 図版 10 (上) 第 4 調査区 S X 03 礫出土状況（南東から）
(中) 第 3 調査区 S X 05 遺物出土状況（南西から）
(下) 第 3 調査区 S X 05 遺物出土状況（微細）
- 図版 11 出土遺物(1)
- 図版 12 出土遺物(2)
- 図版 13 出土遺物(3)



No.	遺跡名	時代	遺構・遺物	調査
1	田島	弥生(後)	弥生土器	
2	下の坪	古代	条里跡	
3	柳坪	奈良	須恵器, 土師器	
4	御門Ⅱ	弥生(後)	弥生土器	
5	喜蔵ヶ谷	弥生(後), 古代	弥生土器	
6	御門Ⅰ	弥生(後)	弥生土器	
7	森前	弥生(後), 古墳, 奈良	須恵器, 土師器, 石斧, 住居跡	
8	森前外屋敷	弥生~鎌倉	弥生土器, 須恵器, 土師器	S 60
9	御門前	弥生~中世	弥生土器, 須恵器, 土師器	
10	辻ノ前	古代, 中世	須恵器, 山茶碗, 小皿	
11	頼実	古代	須恵器, 土師器	S 61
12	東ノ坪	弥生~中世	弥生土器, 須恵器, 土師器, 石斧	S 61~62
13	内田御屋敷	弥生(中)	弥生土器	S 61
14	政所	弥生(後), 古墳(後)	弥生土器, 須恵器, 土師器	
15	耳川	縄文~古墳, 鎌倉	弥生土器, 須恵器, 土師器, 銅釧	S 60
16	高田大屋敷	中世	土塁	
17	古川	弥生~平安	弥生土器, 須恵器, 土師器, 石鏃	S 60
18	白岩	縄文~鎌倉	縄文土器, 弥生土器, 須恵器	S 41, 59, 62
19	長池	縄文, 弥生, 古墳, 中世	縄文土器, 弥生土器, 石斧, 古銭	S 62

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経過と調査の目的

田島遺跡が所在する掛川市上内田は、市の南東部に位置する。上内田地域は、上小笠川により形成された沖積平野に広がる水田と、川の両側の丘陵に営まれる茶園からなる、農業の盛んな、緑豊かなところである。遺跡名でもある「田島」という字名は、水田に囲まれた小高い土地が「田の中の島」のように見えたことからつけられたのだろうか。

市道田島桶田線は、掛川市と菊川町との境に位置する田島地区と隣接する桶田地区を結ぶ道路である。一般車両の通行は少ないが、農繁期には水田と茶畑に向かう農作業用の車両が多く往来するため、地元から道路拡幅の要望が上がっていた。そこで、平成7年1月18日に埋蔵文化財所在確認調査を実施し、遺構遺物が確認されたため、平成6年度から平成8年度にわたり、調査地点を4区に分けて発掘調査を実施した。

2. 調査の方法と経過

今回の調査は、道路拡幅工事地点が4地点に分かれており、それぞれの工事に際して調査を実施した。そのため、地点により調査年度と調査担当者が異なる（調査の経過参照）。また、調査区の1辺5mの区画は、それぞれの調査地点で任意に設定し、遺構名も地点ごと各々でつけたため、グリッド名や遺構名が重複している。本報告書では、混乱を避けるため、平成6年度調査地点を第1調査区、以下、第2調査区（平成7年度調査地点）、第3調査区（平成8年度調査地点）、第4調査区（同）とし、第1調査区のA-1区などと呼ぶことにした。

調査は、まず、重機による茶樹の抜根、耕作土等の表土の掘削を行った。続いて人力による遺構の掘削作業を行った。遺構の検出・遺物の取り上げ・図面作成は、設定した区画に従った。また、平成8年度の調査では、区画を設定した杭を国家座標に拾い出す基準点測量とベンチマークを設定するための水準点測量を業者に委託した。実測作業は、遺構全体図については20分の1縮尺、遺物出土状況図・遺構断面図については10分の1縮尺で作成した。写真による記録は、ブローニーサイズ（6×7）原画白黒、35mmサイズ原画白黒、同リバーサル撮影によった。

調査の経過は、以下のとおりである。

平成6年度調査

平成7年1月30日	第1調査区重機掘削
1月30日～2月3日	第1面、人工による遺構掘削・図面作成
2月6日	遺構完掘状況写真撮影・実測作業
2月7日	人工による第2面への掘削。
2月8日	第2調査区、確認調査
2月8日～9日	人工による遺構掘削・図面作成
2月10日	遺構完掘状況写真撮影・実測準備・発掘器材片付け
2月11日	遺構実測

平成7年度調査

平成7年4月17日～18日	第2調査区重機掘削
4月18日～26日	人工による遺構掘削・図面作成
4月27日～28日	遺構完掘状況写真撮影・実測・発掘器材片付け

平成8年度調査

平成8年11月11日、19日、20日	第4調査区重機掘削
11月19日～12月3日	人工による遺構掘削・図面作成
12月4日～12月13日	遺構完掘状況写真撮影・実測
12月16日～12月17日	第3調査区重機掘削

平成8年12月17日～	人工による遺構掘削・図面作成
平成9年1月7日	

平成8年12月26日	基準点測量及び水準点測量
------------	--------------

平成9年1月8日～1月17日	遺構完掘写真撮影・実測
----------------	-------------

1月20日	発掘器材片付け
-------	---------

(調査は道路工事の都合上第4調査区から実施したが、便宜上、第2調査区の続きを第3調査区とした。)



第 2 図 遺跡の周辺地形図

3. 遺跡をめぐる環境

田島遺跡は菊川水系の上小笠川が形成した沖積地に立地する。現在は遺跡地のすぐ北東側上小笠川が流れる。

掛川市における田島遺跡周辺の遺跡の調査は数例の確認調査が行われたのみであり、また、いずれも本調査に至っていない。そのため、ここでは遺跡分布調査および菊川町内の発掘調査の成果をあわせて、遺跡をめぐる環境を概観したい。

田島遺跡の周辺においては旧石器時代の遺跡は現在確認されていない。縄文時代の遺跡として遺跡が知られているが分布は局地的である。遺跡の立地は段丘上と丘陵地を背にした沖積地に見られる。

五百済遺跡・王子遺跡は、同じ段丘面に立地する。縄文時代早期の押型文土器や中期・晩期の土器が出土しており、遺跡範囲も他に比べてかなり広い。内容的この地域の拠点遺跡とされる。他の縄文時代遺跡の多くは中期後葉である。この時期に遺跡が急増する傾向は周辺地域でも見られる現象であり、急激な人口の増加を意味する可能性が高いとされている。上小笠川の下流の菊川町内の縄文時代の遺跡には、東平尾遺跡、段平尾遺跡、耳川遺跡などがある。

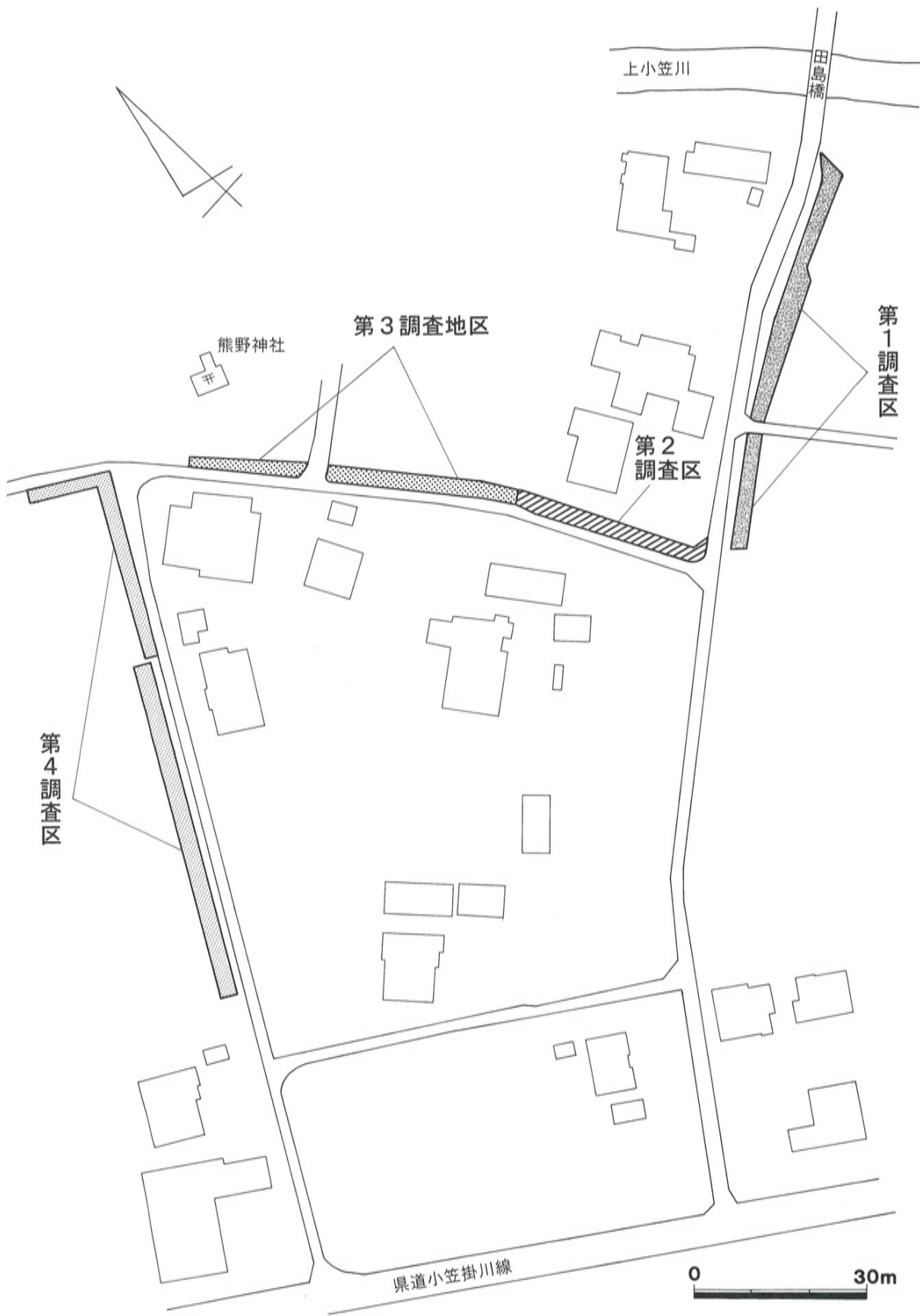
弥生時代の遺跡は多くは後期のものようである。詳細が知られるものはない。この時期に遺跡が増える傾向にあることも周辺地域と同様である。菊川町内の耳川遺跡から弥生時代中期から後期の土器や木製品などが出土している。また、東ノ坪遺跡では、同時期の方形周溝墓群が検出されている。古墳時代の遺跡は前期からみられる。『静岡県史 資料編3 考古三』には、古墳時代の重要遺物として掛川市栗原出土の子持勾玉1点が紹介されているが、出土状況等の詳細は不明である（※なお、「栗原」は、菊川町内の地名である）。古墳の分布は掛川市域には知られず、横穴群が見られるのみである。

奈良・平安時代の遺跡は田島遺跡から下流域に限ってみられる。菊川町の森前外屋敷遺跡からは8世紀代の須恵器・土師器の土器溜まりを検出している。御門前遺跡D・E地点の調査では三面廂の掘立柱建物跡などが検出され平安末から鎌倉時代前半にかけての遺跡とされている。

中世には、この地域の地頭である内田氏の居館跡と考えられる高田大屋敷遺跡が、上小笠川と菊川の合流点にある。土塁の発掘調査が行われ、築造年代の上限が12世紀末ないし13世紀前半であることが確認された。「内田庄」と呼ばれる荘園が、掛川市上内田から菊川町下内田にかけての上小笠川流域にあったことが記録に見られる。記録によると、内田庄は「内田庄上郷」と「内田庄下郷」に分かれており、「上内田」の地名はこれに由来している。

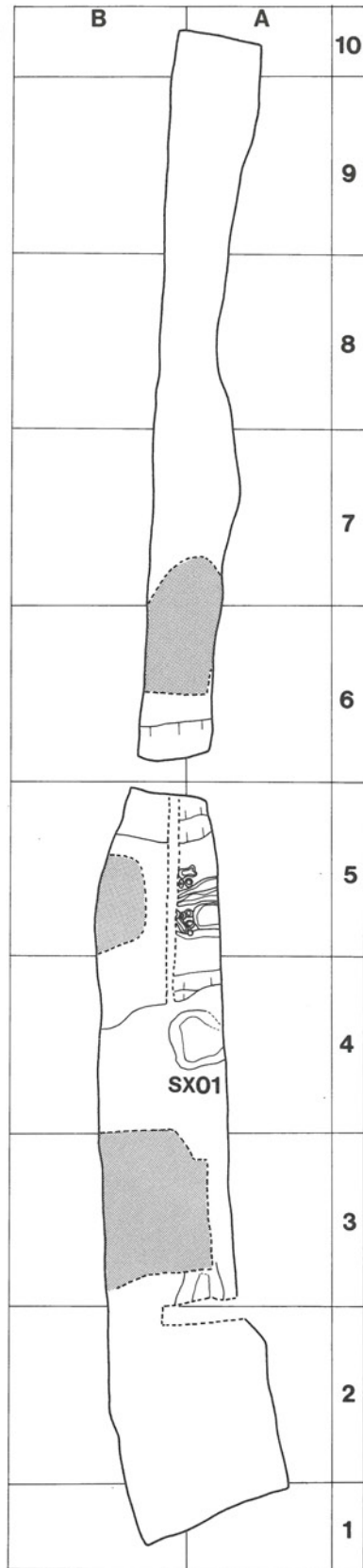
〈参考文献〉

- | | | |
|--------------|-----------------|------|
| (1) 掛川市教育委員会 | 『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』 | 1984 |
| (2) 斎田茂先 編 | 『掛川誌稿(全)』 | 1972 |
| (3) 菊川町教育委員会 | 『高田大屋敷遺跡』 | 1993 |
| (4) 静岡県教育委員会 | 『静岡県遺跡地図』 | 1989 |
| (5) 静岡県教育委員会 | 『静岡県史 資料編3 考古三』 | 1992 |

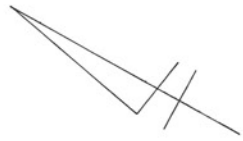
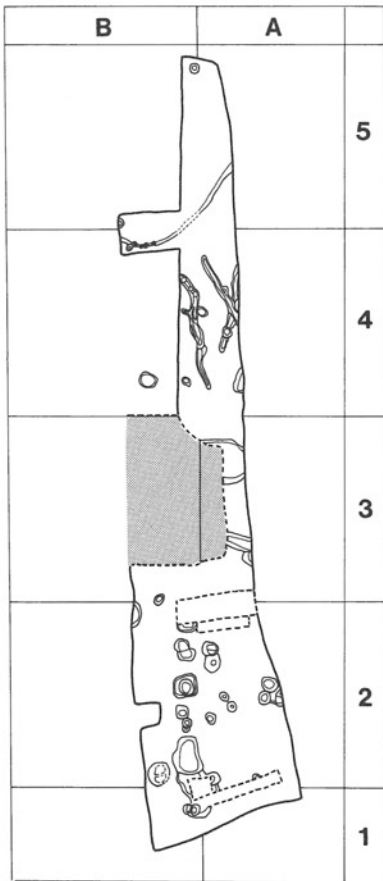


第3図 調査区全体図

第1面



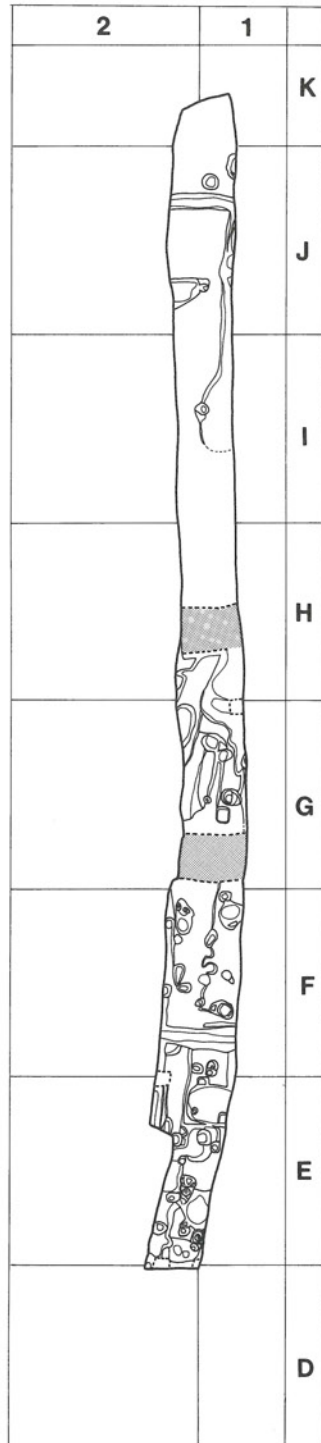
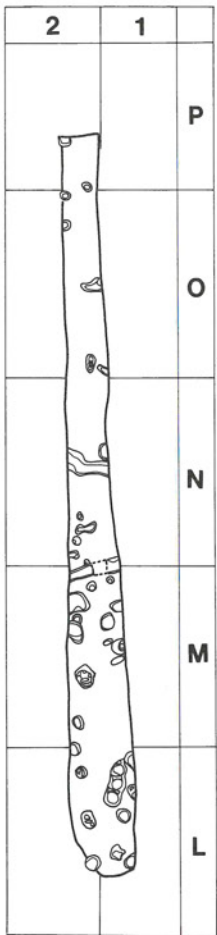
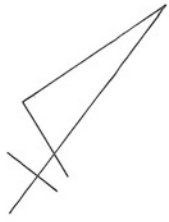
第2面



■ = 試掘抗・攪乱

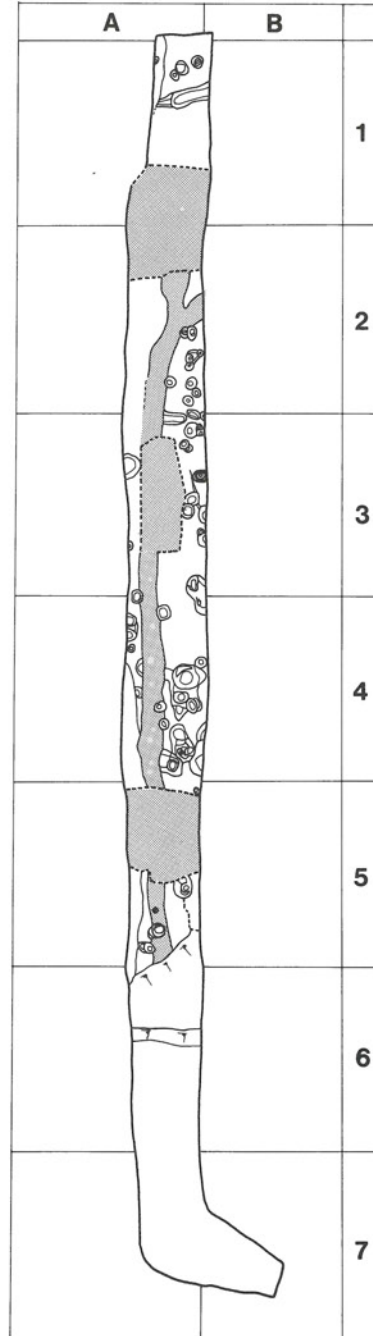
0 10m

第4図 遺構全体図 (第1調査区)



第2調査区

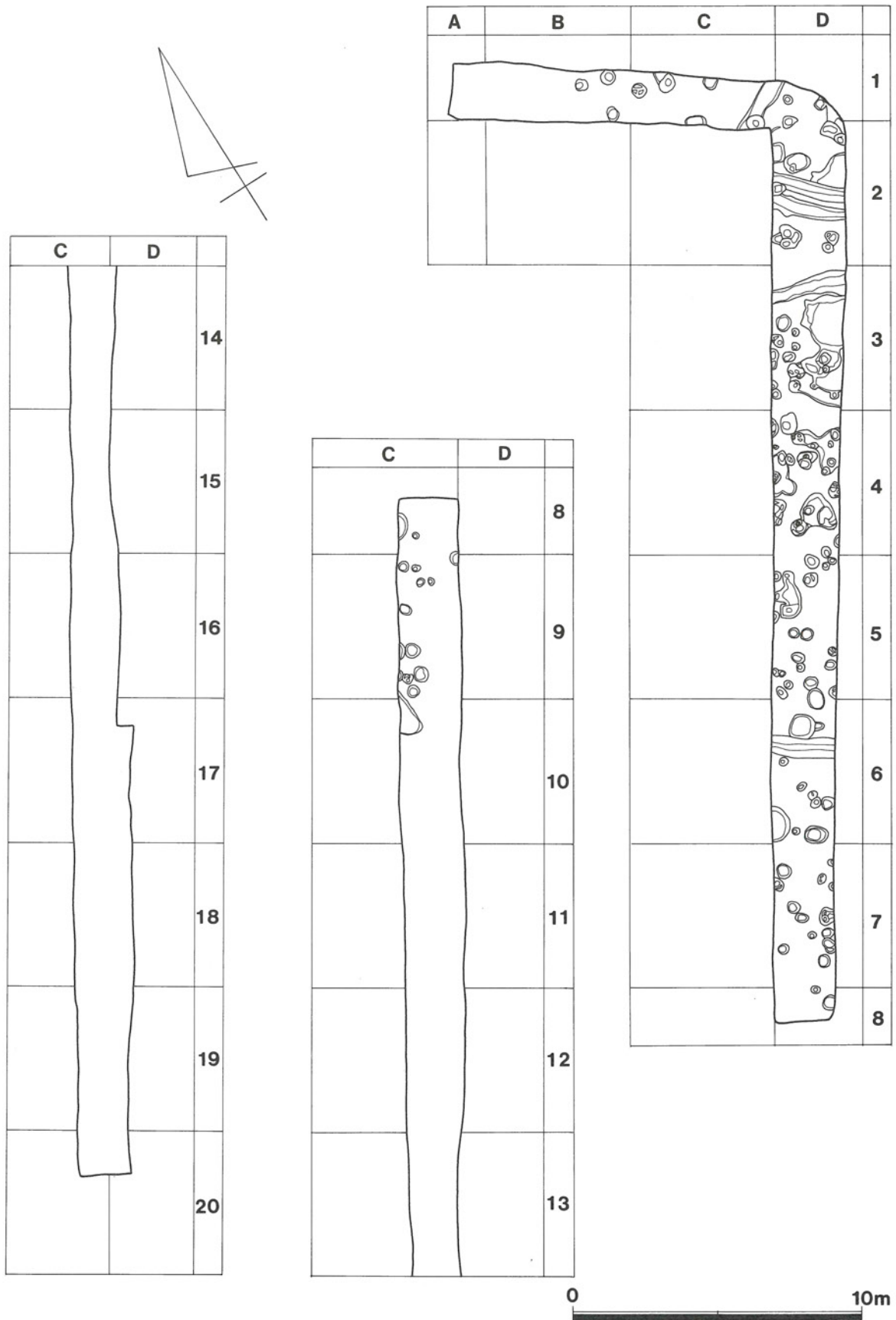
■ = 試掘抗・攪乱



第3調査区

0 10m

第5図 遺構全体図 (第2・3調査区)



第6図 遺構全体図（第4調査区）

Ⅱ 調査の概要

1. 遺 構

第 1 調査区

第 1 調査区は現状水田となっており確認調査の結果、2面の文化層の存在が認められた。調査は、道路拡幅工事の工期の関係で緊急に終了させる必要があり、工事によって埋蔵文化財が破壊される深度に及ぶ箇所について行うこととし、破壊を免れる部分については現状保存とした。

以下、各面の遺構について記述する。

第 1 面

表土（水田耕作土）下0.2～0.3 mより確認された灰色粘土層及び暗褐色粘土層上を第 1 面とした。遺構の分布は調査区の中程に見られ、A・B-1・2区及びA・B-7～10区からは検出しなかった。発見された遺構はおもに溝状のもので、ピット状のものも複数見られたが、いずれも径が小さく浅いもので、建物の柱穴などになるものはない。溝状の遺構は自然の流路と思われる。A-3区で検出したSD03については、はっきりとした堀方、立ち上がりが認められ、人工のものと考えて良いと思われる。しかし、南側に続かないことから、溝状遺構としない方がよいかもしれない。

SX01(第7図)

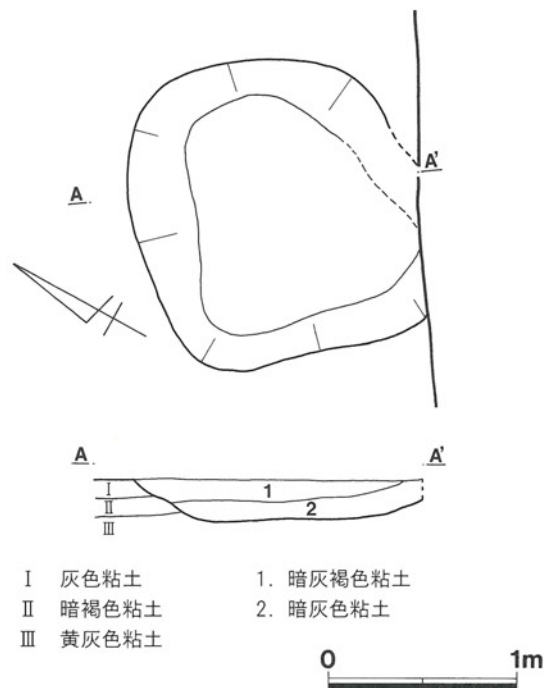
A-4区で検出した。一部が調査区外に及んでいるが、やや台形に近い平面形態である。断面形態は皿状をなす。底はほぼ平らである。土層を観察すると、1層にはI層が、また2層にはII・III層がそれぞれブロック状に混入している。遺物の出土は多くないが、第13図5が1層中から出土している。

第 2 面

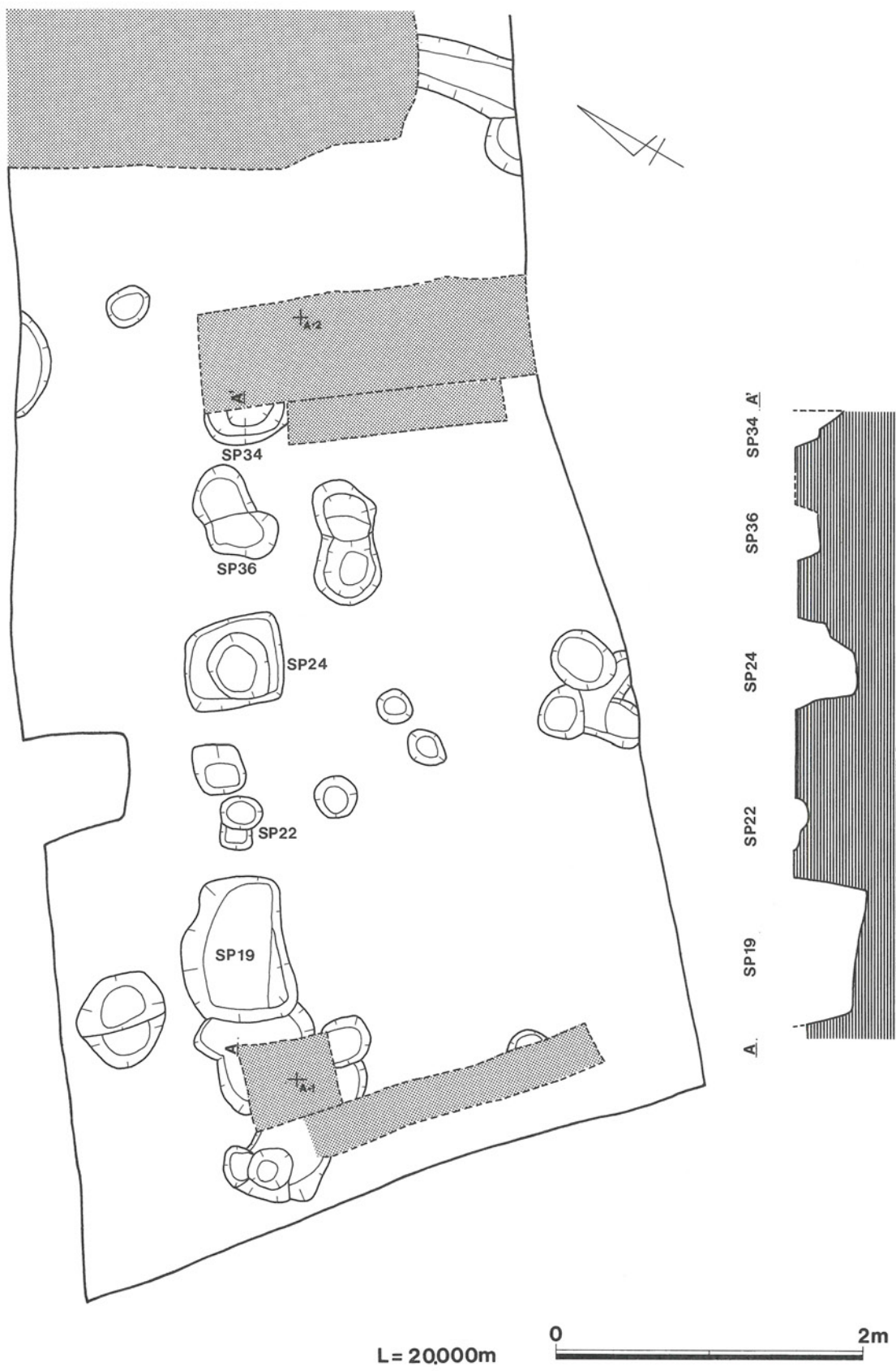
第 1 面下約0.2～0.3 mの黄灰色粘土層上で検出した。調査については前述のように、直接工事により破壊される部分のみ掘り下げることとした。また、A・B-6～10については下層に埋蔵文化財の存在が認められなかったため、掘削しなかった。

A・B-1・2区からは柱穴と思われるものを含むピットが26検出された。そのうち、直線上に並ぶものを拾い、断面図を示した（第8図）。

SP19・22・34はいずれも平面形が方形に近く、深さも約0.4mである。芯々距離はSP19・22は1.83mを測る。SP34は底面が未確認だが、SP22との距離ほぼ1.8mに近いものと思われる。さらに、SP22とSP36は、径が小さく浅いが、SP19・24・34のちょうど中間に位置している。



第 7 図 第 1 調査区 SX01 実測図



第8図 第1調査区第2面遺構実測図

第 2 調査区

この調査区の現状は宅地となっていた。検出された遺構面は1面で、地山は黄褐色土層である。

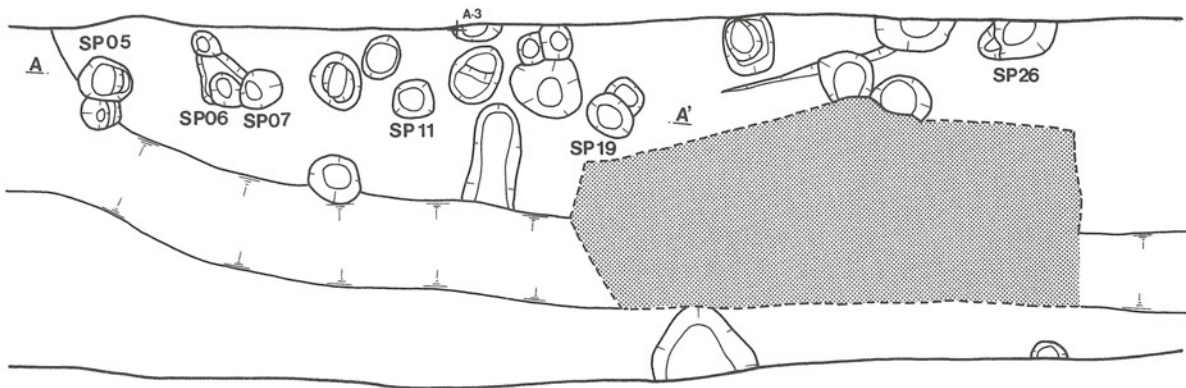
ちょうど、調査区を縦断するように幅0.4～0.5 m、深さ約0.2 mの溝状の遺構が走っている。一部とぎれるが、第3調査区でも見つかっている。これは、今回の調査で検出した遺構のすべてを切っており、最も新しく位置づけられる。覆土は暗さの強い暗褐色土で、しまりがかなり弱い土である。遺物が全く出ていないため時期は決めかねるが、江戸時代を遡ることはないと思われる。現在の道路と平行であるため、古い道の側溝のようなものではないだろうか。

A-6区より南東側は砂利層となっており、遺構の検出はなかった。

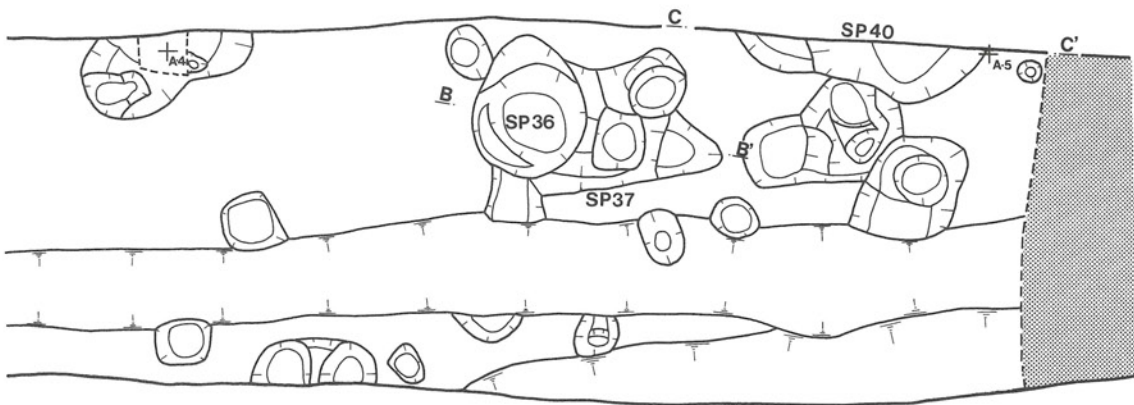
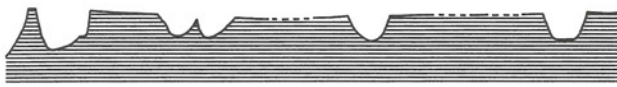
遺構がやや集中して検出されたのはA-2～4区である。A-2・3区からは比較的小さいピットを検出している。調査区の幅が狭いので制限が多いが、径と深さがほぼ同じで直線的に並ぶものを図示した(第9図)。SP05は最大径が0.31 m、深さ0.25 mを測る。SP06はSP07に切られている。SP07は径0.25 m、深さ0.12 mを測る。SP11は径0.25 m、深さ0.15 mを測る。SP19は径が0.28 m、深さ0.15 mを測る。ピット間の距離はSP05とSP07は0.9 m、SP07とSP11は0.96 m、SP11とSP19は1.2 mを測る。覆土はいずれも、地山の黄褐色土を粒子状もしくはブロック状に含む暗褐色土の単一層であった。その他のピットも小さいながらも柱穴状を呈すものも多く見られたが、相互の関係は不明である。

また、SP26は調査区外に及んでいるが、最大長0.52 m、深さ0.14 mを測る。ここからは、丸子式と思われる甕口縁の小破片と、両面を打ち欠き薄く仕上げられた石垂が出土している。

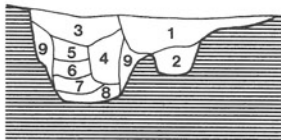
A-4区にはやや大きいピットが検出され、切り合いも多くなっている。ピットは柱穴と考えられるものが多い。第9図にSP36の土層断面図を示した。SP36は隣接するSP37に切られているが、最大径0.86 m、深さ約0.6 mを測る、柱穴と思われるピットである。断面図はやや柱の芯をはずれたかも知れないが、覆土を観察すると、穴の周囲の9層は固くしまっており、柱が立てられた跡と思われる4層を支える5～8層はいずれも暗褐色土で、地山の黄褐色土のブロックの混入の度合いがそれぞれ違う。柱は抜き取られたものと思われるが、径は12cm程度と推定される。出土遺物は土師器・須恵器の小片に混じり志戸呂焼小皿の小片が見られるため、近世のものと思われる。



A SP05 SP06 SP07 SP11 SP19 A'



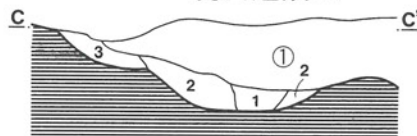
B SP36 SP37 B'



- 1. 暗茶褐色土 } S P 37
- 2. 暗褐色土 }
- 3. 暗茶褐色土 }
- 4. 暗茶褐色土 }
- 5. 暗褐色土 }
- 6. 暗褐色土 }
- 7. 暗褐色土 }
- 8. 暗褐色土 }
- 9. 黒褐色土 }

SP40

現代造成土

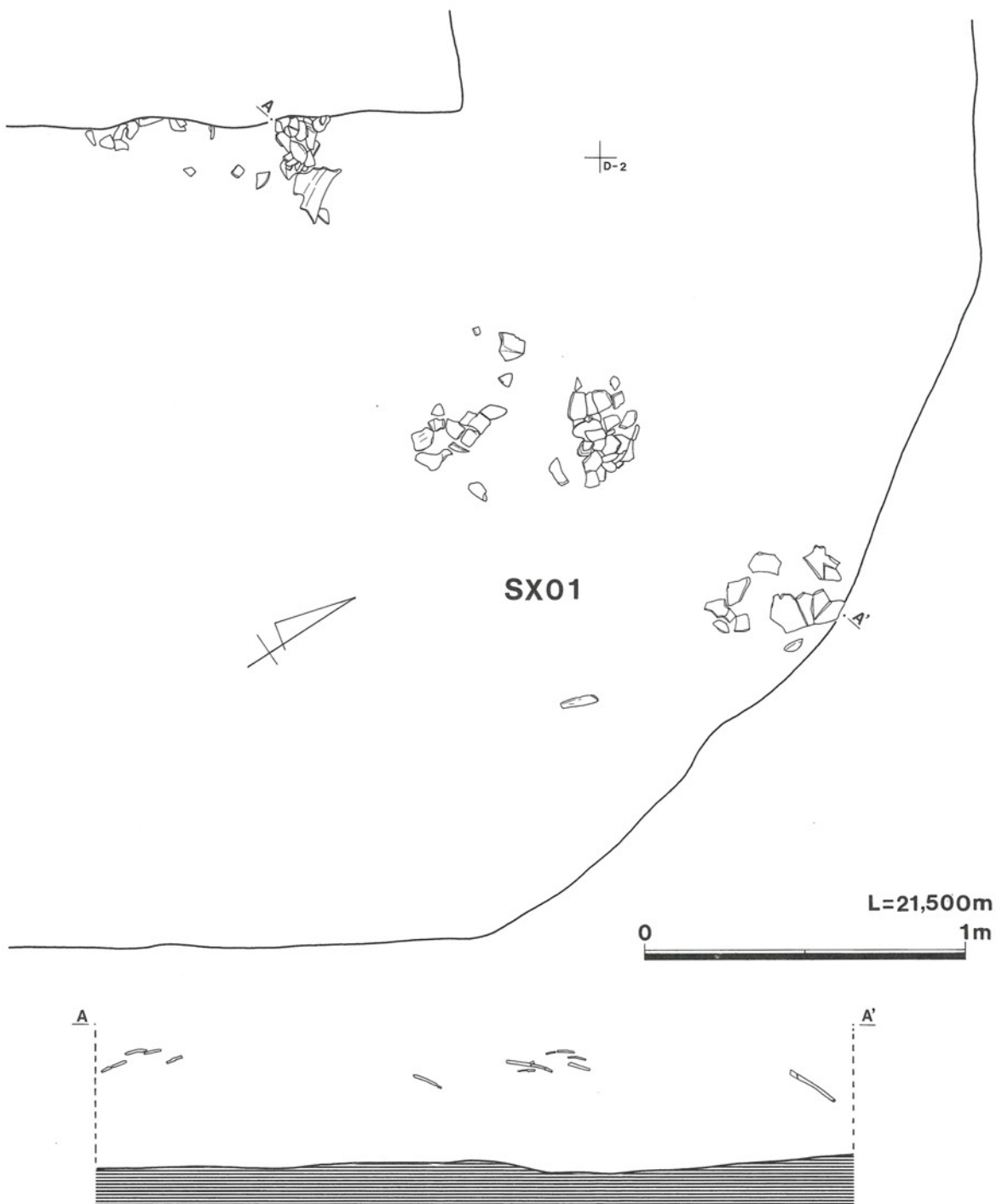


- ① 暗褐色土(近代造成土か)
- 1. 黒褐色土
- 2. 暗褐色土
- 3. 暗茶褐色土

L=21.000m



第9図 第2調査区遺構実測図

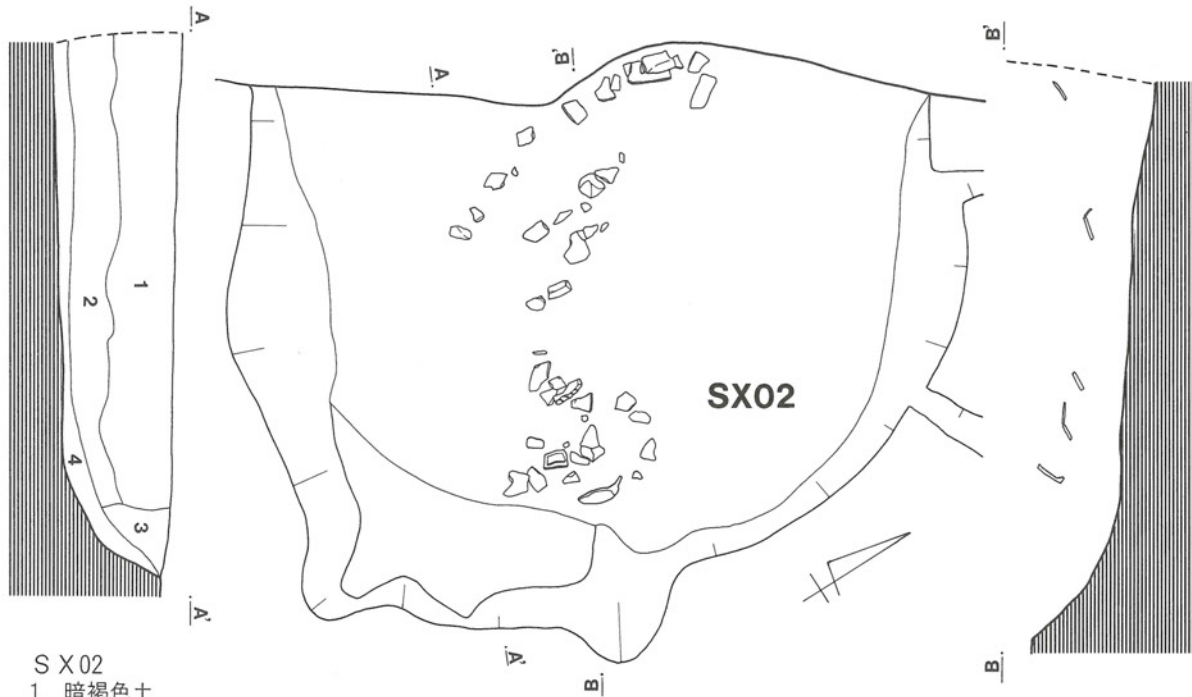


第10図 第4調査区SX01実測図

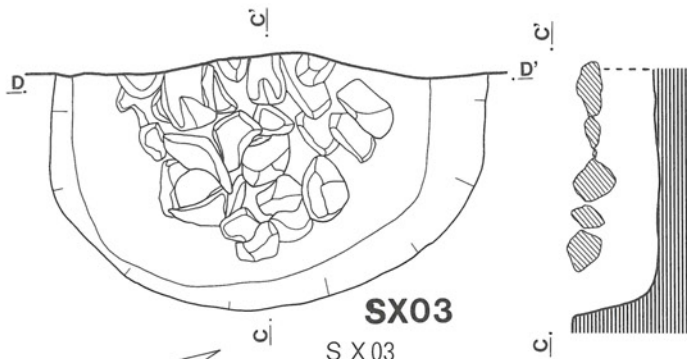
第3・4調査区

SX01 (第10図)

第4調査区のD-1・2区で検出した。重機掘削中に土器が集中して検出されたが、それに伴う遺構の確認はできなかった。出土土器のレベルは、その他の遺構が検出された地山面よりも約30cm程高い。土器の検出範囲は、南北約1.0m、東西約2.8mである。器形復元できる土器はなかったが、第15図64に示した甑または把手付壺の把手部分が出土している。

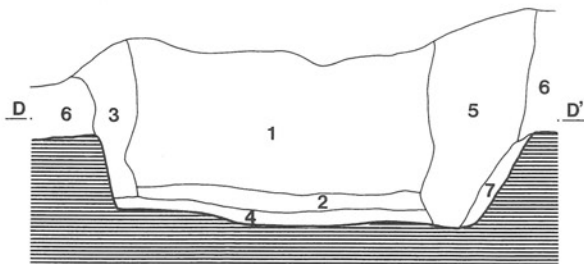


- S X 02
1. 暗褐色土
 2. 暗褐色土
 3. 暗黄褐色土
 4. 暗黄褐色土



- S X 03
1. 暗褐色土
 2. 暗灰褐色土
 3. 暗灰褐色土
 4. 暗黄褐色土
 5. 暗褐色土
 6. 暗黄褐色土
 7. 暗黄褐色土

耕 作 土



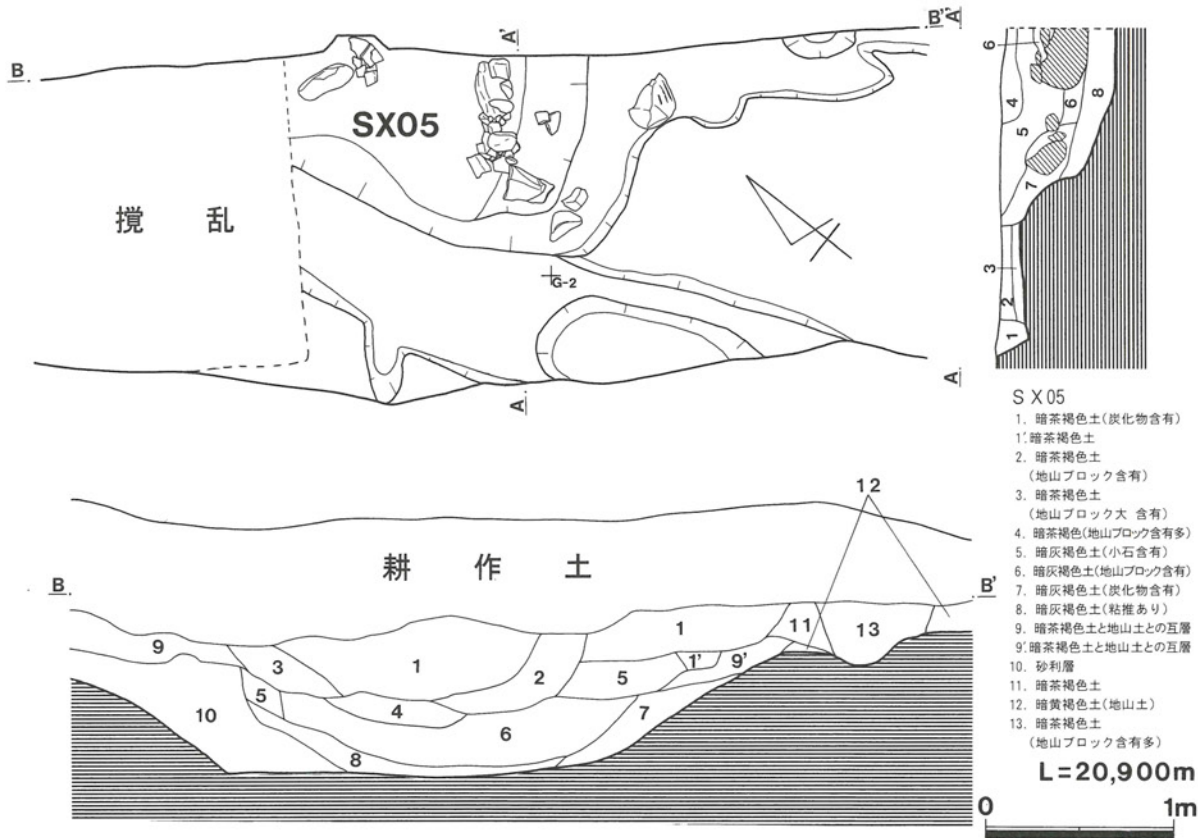
S X 02(第11図)

第4調査区のD-3区で検出した。検出規模は、長径約2.0m、短径約1.7m、確認面からの深さは約30cmを測る。検出部分の形状は、不定形の楕円形を呈する。覆土は、1層が炭化物を含む暗褐色土、2層は地山の暗黄褐色土との溶混がみられる暗褐色土、3層は地山土である。出土遺物は、第14図31~52(43は除く)に示した縄文時代中期に比定される深鉢型土器の口縁部や底部などが出土した。遺構の性格は不明である。

S X 03(第11図)

第4調査区のC・D-6・7区で検出した。検出規模は、長径約1.2m、短径約65cm、確認面からの深さは約60cmを測る。検出したのは約半分ほどで北側調査区外へ続くが、ほぼ円形と考えられる。拳大の河原石が集中して検出された。遺構の性格として、建物の柱を支える根固め石であると考えられるが、調査区内で見つかったのはここだけであり、断言はできない。

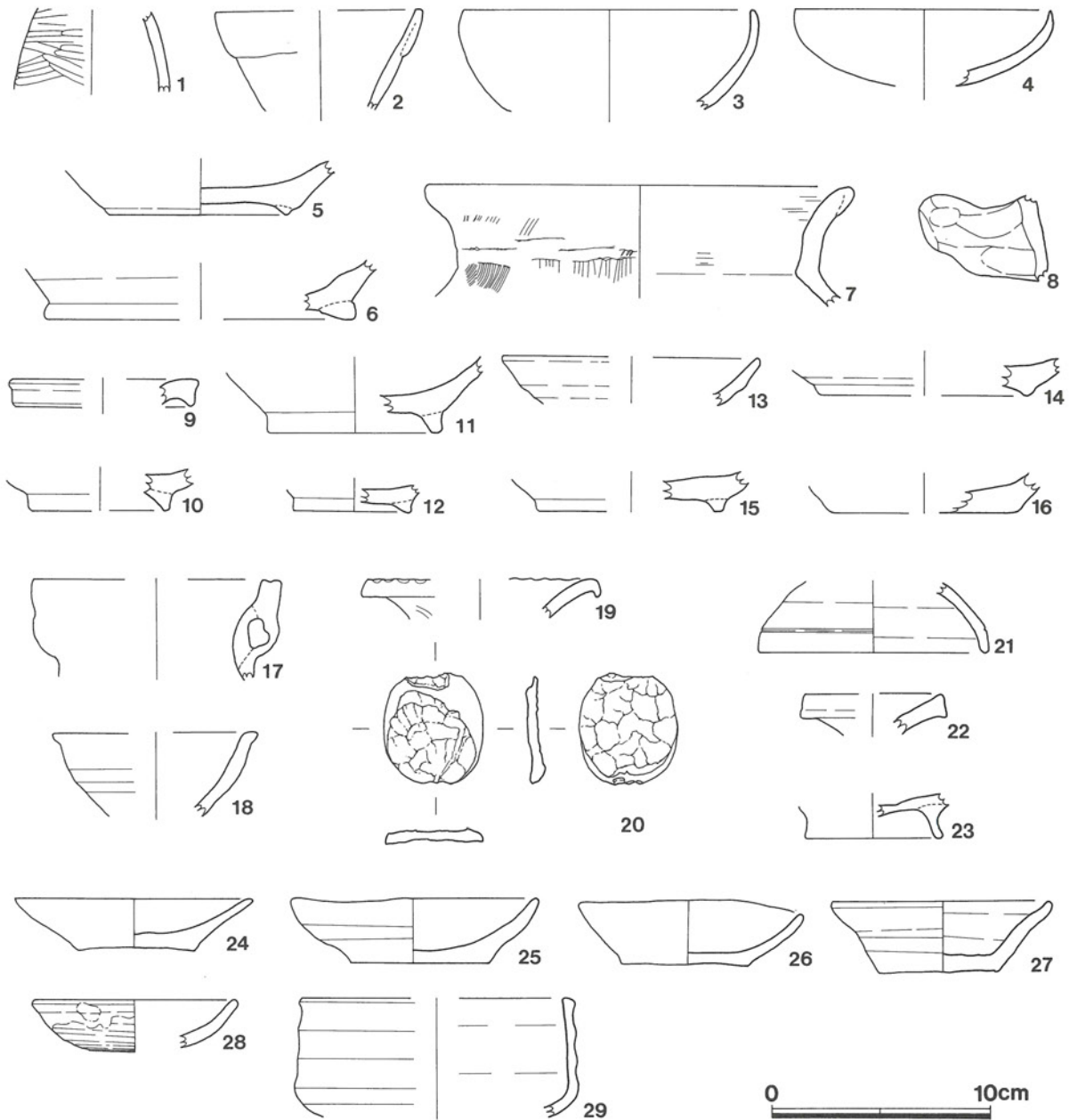
第11図 第4区S X 02・03実測図



第12図 第3調査区S X 05実測図

S X 05 (第12図)

第3調査区のG・H-1・2区で検出した。検出した規模は、長径約3.5m、短径約2.0m、確認面からの深さは約60cmを測る。検出したのは約半分ほどで北側調査区外へ続く。西側は砂利層によって攪乱されている。遺構のほぼ中央付近に、人頭ほどの大きさの石が南北方向に積まれた様な状況で検出され、第15図69～71に示した16世紀後半から17世紀前半に比定される内耳鍋が石の下から出土した。遺構の性格としては、煮沸用の土器である内耳鍋が出土したことから、調理施設に関係のある遺構と考えられる。



第13図 遺物実測図(1)

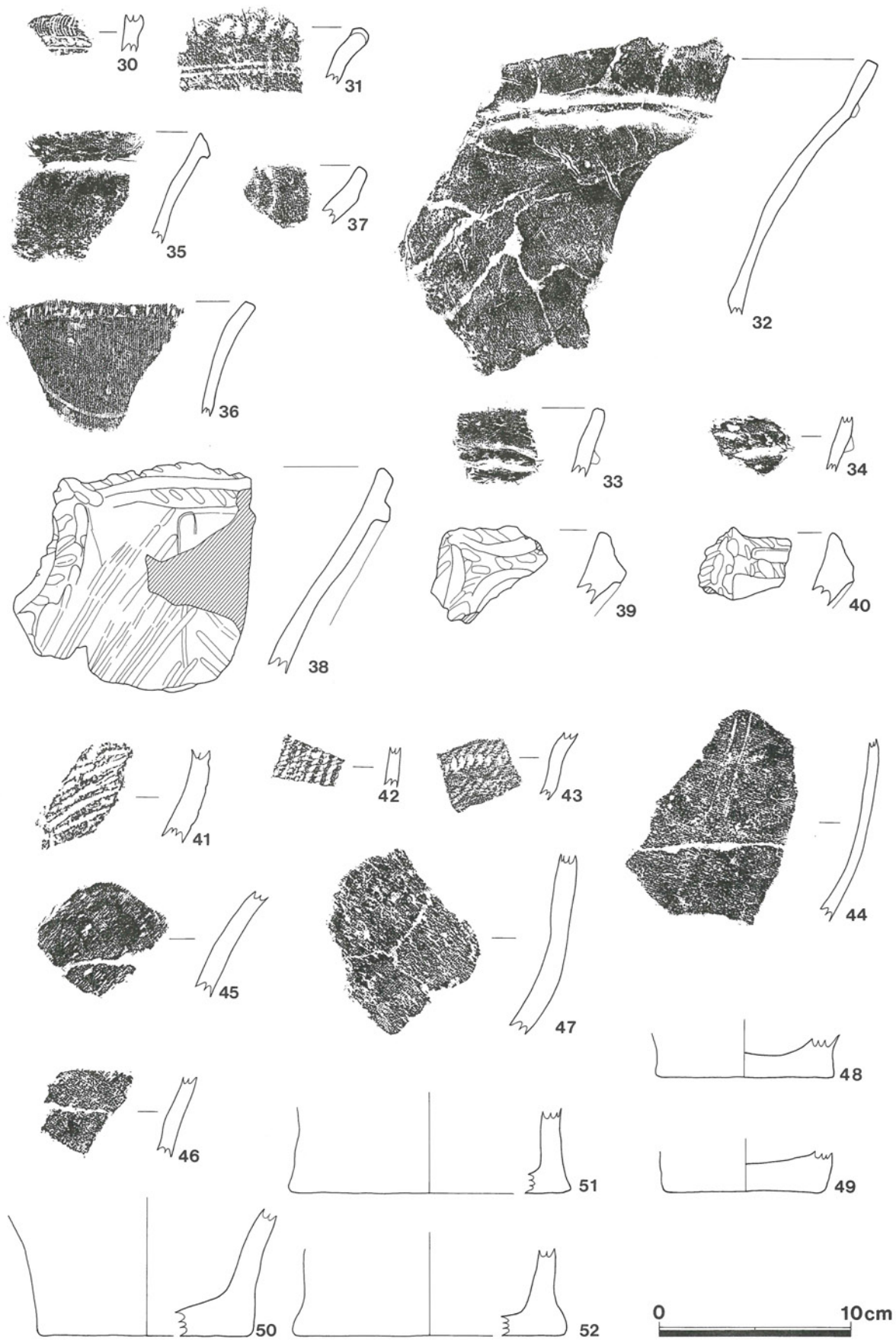
2. 遺物

以下、遺物について記述する。1～18は第1区、19～29は第2区、30～71は第3・4区から出土したものである。

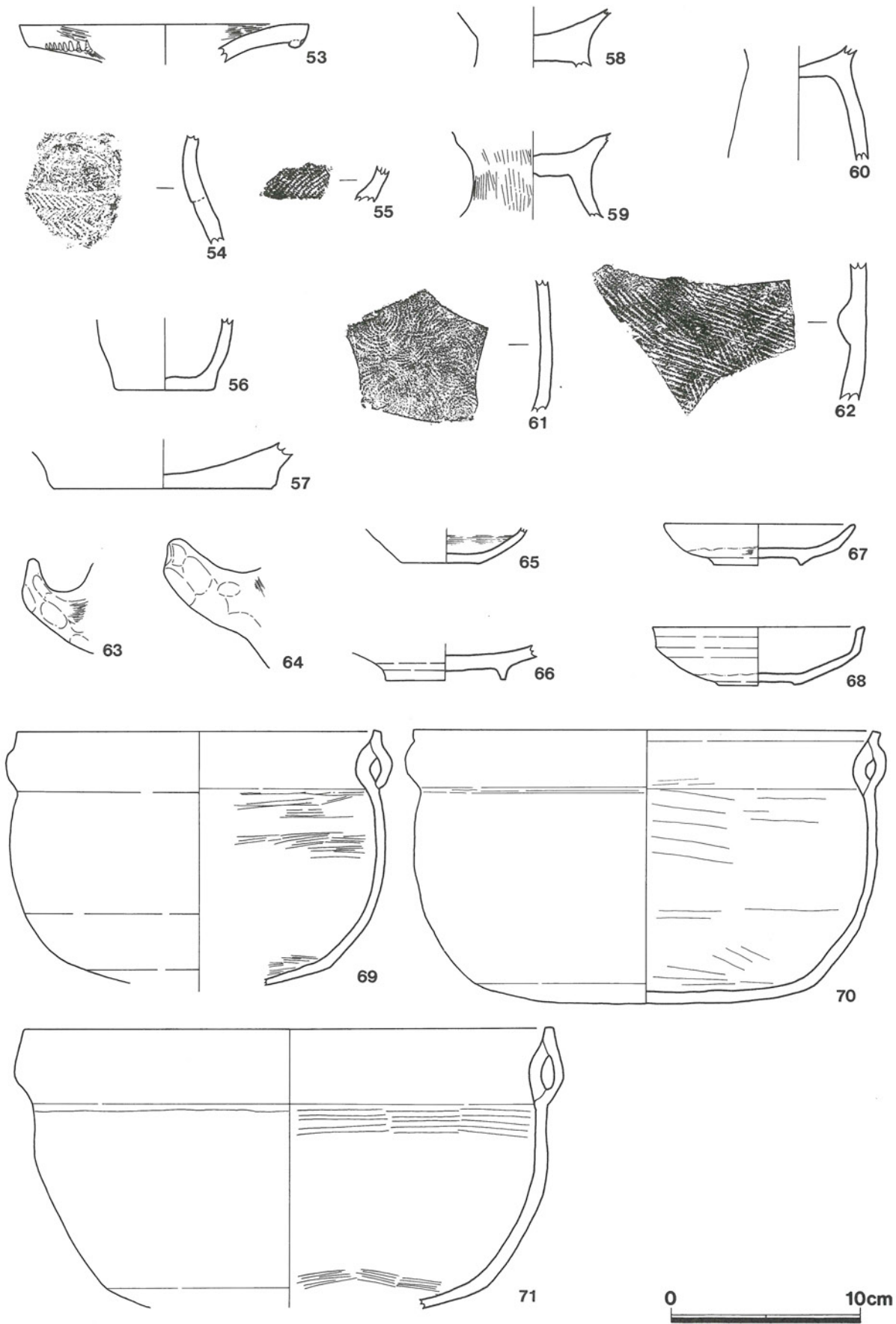
1～4は第1面で検出したSD04から出土した土師器である。1は小型の壺の胴部小破片である。外面に横位・斜位のミガキを施す。内面の調整は磨耗のため不明である。2は折り返しを施された口縁部小破片である。鉢であろうか。内外面とも磨耗が著しく調整は不明である。3・4は坏である。口径はどちらも推定だが3は12.8cmを4は11.3cmをそれぞれ測る。どちらも口縁はやや内湾する。内外面とも磨耗が著しく調整は不明である。5はSX01より出土した須恵器壺底部である。低い高台を貼り付けた底部は径8.1cmを測る。内面は磨耗しており使い込まれたことを伺わせる。また、一部に自然釉の

付着が見られる。6は須恵器壺底部破片である。底径は推定で13.7cmを測る。7は土師器壺口縁部から頸部破片である。口径は推定で19.1cmを測る。口縁は折り返しとなっており、頸部内面はくの字にやや鋭く屈曲する。器面は磨耗しているが、外面は板状工具により整形を仕上げた後、縦位の刷毛目を施している。内面はヨコナデ調整されている。8は土師器の把手である。9は須恵器壺口縁部破片である。外面には薄く自然釉が付着している。10はS P 24から出土した灰釉陶器小碗底部破片である。貼付の高台は断面三角形を呈す。高台径は推定で6.2cmを測る。11は灰釉陶器底部破片である。やや肥厚した高台を付けている。高台径は推定で7.6cmを測る。12は山茶碗小皿底部破片である。断面三角形の高台を貼り付けている。高台径は推定で5.3cmを測る。13・14はA-7区のトレンチ掘削時に出土した。13は山茶碗小碗口縁部破片である。口径は推定で11.4cmを測る。14は山茶碗底部破片である。削り出しで整形された高台は高さ0.5cm、径は推定で9.4cmを測る。15・16はS X 01より出土した山茶碗底部破片である。断面台形の高台は高さ0.55cmを測る。内側の立ち上がりぎわまでの器面は磨耗している。16は高台を付けないもので内側は15と同様磨耗している。17はS P 19から出土した内耳鍋口縁部破片である。18はS P 35から出土した、施釉陶器碗の口縁部破片である。素地は灰色で灰釉を掛けている。

19はS P 29から出土した弥生土器丸子式の甕口縁破片である。磨耗が著しいがキザミを施した口唇は、端部を直角につまみ出している。外面にはかすかに斜位の条痕が残る。20も同じくS P 29より出土した石垂である。最大長は5.0cm、最大幅4.4cm、最大厚0.7cmを測る。両面を打ち欠き、かなり薄くしていることが特徴である。21はS P 37から出土した須恵器坏蓋破片である。天井部を欠いている。口径は推定で10.2cmを測る。口縁部には沈線化した稜がみられる。22はS X 03から出土した須恵器壺口縁部破片である。内・外面とも自然釉の付着が見られ、内面から口唇外面に、やや厚く残る。23は土師器高台付碗の底部破片である。高台は高さ1.5cmを測り、高台径は推定で6.0cmを測る。器面は磨耗し調整は不明である。24~27は造成土と思われる暗褐色土中から出土したは土師質の小皿、いわゆるかわらけである。24は口径10.6cm、底径5.2cm、器高2.3cmを測る。立ち上がりはややシャープである。25は一部が欠損しているが、ほぼ完形である。口径11.0cm、底径6.1cm、器高3.9cmを測る。内面の一部に煤の付着が見られるので、灯明皿として使われたものであろう。26は完形品である。法量は口径10.1cm、底径5.6cm、器高2.9cmを測る。形態には、ねじれたように歪みがある。27は口径9.5cm、底径5.2cm、器高3.2cmを測る。内面底には轆轤回転時に指を押しつけ整形した跡が残る。28は瀬戸・美濃の小皿である。約2分の1が残存している。口径8.8cm、底径3.9cm、器高2.3cmを測る。釉薬は付け掛けにより施されている。内面には五角形になるとチンの跡が残る。29はS P 33から出土した、志戸呂焼の茶筒の破片である。口径は推定で12.0cmを測る。底部を欠くが、高台の付くものである。



第14图 遺物実測図(2)



第15図 遺物実測図(3)

30～71は平成8年度調査で出土した土器である。

30～52は縄文時代中期の土器である。

30は第3調査区のS P 219から出土した深鉢の胴部片である。上部に半裁竹管状工具による連続爪形文を施し、直下に一条の横方向の沈線を施す。その下には、縦方向の平行沈線を施す。中期初頭の北裏C式土器と思われる。

31～52（43は除く）は第4調査区のS X 02から一括出土した縄文土器である。

31は深鉢口縁部片である。端面には半裁竹管状工具による連続刺突（押しき）が施される。口縁直下に半裁竹管状工具による横方向の平行沈線が巡る。32は波状口縁をなす深鉢の口縁部片である。口縁部の下に一条の隆帯が貼り付けられている以外は無文である。33は32と同一個体と思われる口縁部片で、口縁直下に隆帯を貼り付ける。34は32・33と同様に隆帯の付く口縁部に近い部位の破片だが、同一個体ではないと思われる。35は折り返し口縁をもつ深鉢の口縁部片である。口縁は肥厚した縁帯状を呈する。36は深鉢の口縁部片である。端面に刻目を施す。曲線を描く沈線が施される。37は小型の深鉢口縁部の把手片である。口縁部頂点から弧を描くように隆帯が付けられる。隆帯は口縁端面から突出し、突起状を呈する。38は深鉢口縁部の把手片である。口縁はへら状工具による刺突文を施した隆帯で立体的に加飾し、その下にへら状の工具による綾杉文を施す。37と同様に隆帯が口縁端面から突出し、突起状を呈する。今のところ市内の出土縄文土器に類例はみられない。39・40も38と同一又は同様の深鉢の口縁部片である。41は深鉢の胴部片である。明瞭な多条の沈線が施される。38～40と胎土や色調が似ているが、施文工具が異なることから別個体であると思われる。42は深鉢の胴部片である。器面に撚糸文を施す。

43は第3調査区のS P 208から出土した深鉢の胴部片である。中央にへら状工具による押しき文が施され、上下に縄文が施される。時期は不明である。

44は深鉢の胴部片である。縦方向の平行沈線が施される。45～47は深鉢の胴部片で、いずれも無文である。48～52は深鉢の底部片で、いずれも平底である。裾部の立ち上がりの形状により、垂直に立ち上がるもの（48～50）、外反するもの（51・52）に分けられる。

53～60は弥生時代後期の菊川式土器である。53は第3調査区の重機掘削中に出土した壺の口縁部である。推定口径15.5cmを測る。折り返し口縁をなし、口唇部の坦面に刻目を施す。54は53と同一地点で出土した壺の肩部片である。棒状工具による列点文を施し、その下には3段の櫛刺突羽状文を施す。53と同一個体片であると思われる。55は第4調査区のS D 05から出土した壺の胴部片である。縄文が施文される。56・57は壺の底部片である。56は第4調査区のS P 29から出土した。底径5.7cmを測る。平底を呈する。調整は不明である。57は第4調査区のS P 09から出土した。推定底径11.6cmを測る。平底である。内外面とも荒れており、調整は不明である。58～60は台付甕の脚台部である。58は第3調査区S P 49出土から出土した。器面の荒れが激しく調整は不明である。59は第4調査区の重機掘削時に出土した。外面に縦ハケが施される。60は第4調査区S P 46から出土した。器面の荒れが著しく調整は不明である。

61と62は須恵器の甕の胴部片である。61は第3調査区S D 07から出土した。外面にはハケ目、内面には叩き目の痕が残る。62は第3調査区の重機掘削時に出土した。外面にハケ目を施す。内面に焼成時にできたと思われるふくらみがみられる。

63と64は甌または把手付壺の把手部片である。63は第3調査区S X 04から出土した。把手先端が若干欠損する。64は第4調査区S X 01から出土した。63よりも大型である。

65～68は陶器皿である。65は第3調査区S D 07から出土した。口縁部を欠損する。底径3.9cmを測

る。65は第3調査区の重機掘削時に出土した。口縁部と底部の約半分を欠損する。推定底径6.4cmを測る。67と68は志戸呂焼である。67は第3調査区のSD09から出土した。約半分を欠損する。器高2.2cm、推定口径10.2cmを測る。高台の断面は逆三角形を呈する。68は第3調査区の重機掘削時に出土した。約半分を欠損する。器高3.1cm、推定口径11.3cmを測る。垂直気味に立ち上がり、口縁部はやや外側に開く。高台は著しく低い。

69～71は第3調査区のSX05から出土した内耳鍋である。内耳鍋は少なくとも旧国単位よりも狭い地域単位ごとに製作者集団が存在し、それぞれ独自に製作していたということが鈴木正貴氏によって指摘されている。静岡県内では、後藤健一氏と足立順司氏の両氏により、詳細な分類や編年作業がなされている。

69は口縁部から体部の一部と底部全体を欠損する。残存高13.5cm、推定口径20.7cmを測る。70は口縁から体部のほとんどを欠損する。器高14.6cm、推定口径25.2cmを測る。71は口縁部から体部の約半分と底部全体を欠損する。残存高15cm、推定口径28.5cmを測る。いずれも外面にはススが付着する。これらは、半球形の体部や平底を呈する特徴から、鈴木氏の分類による内耳鍋B類（内彎形内耳鍋）、後藤氏の分類による内耳鍋C類に該当すると考えられ、16世紀後半から17世紀前半に位置付けられる。

Ⅲ まとめ

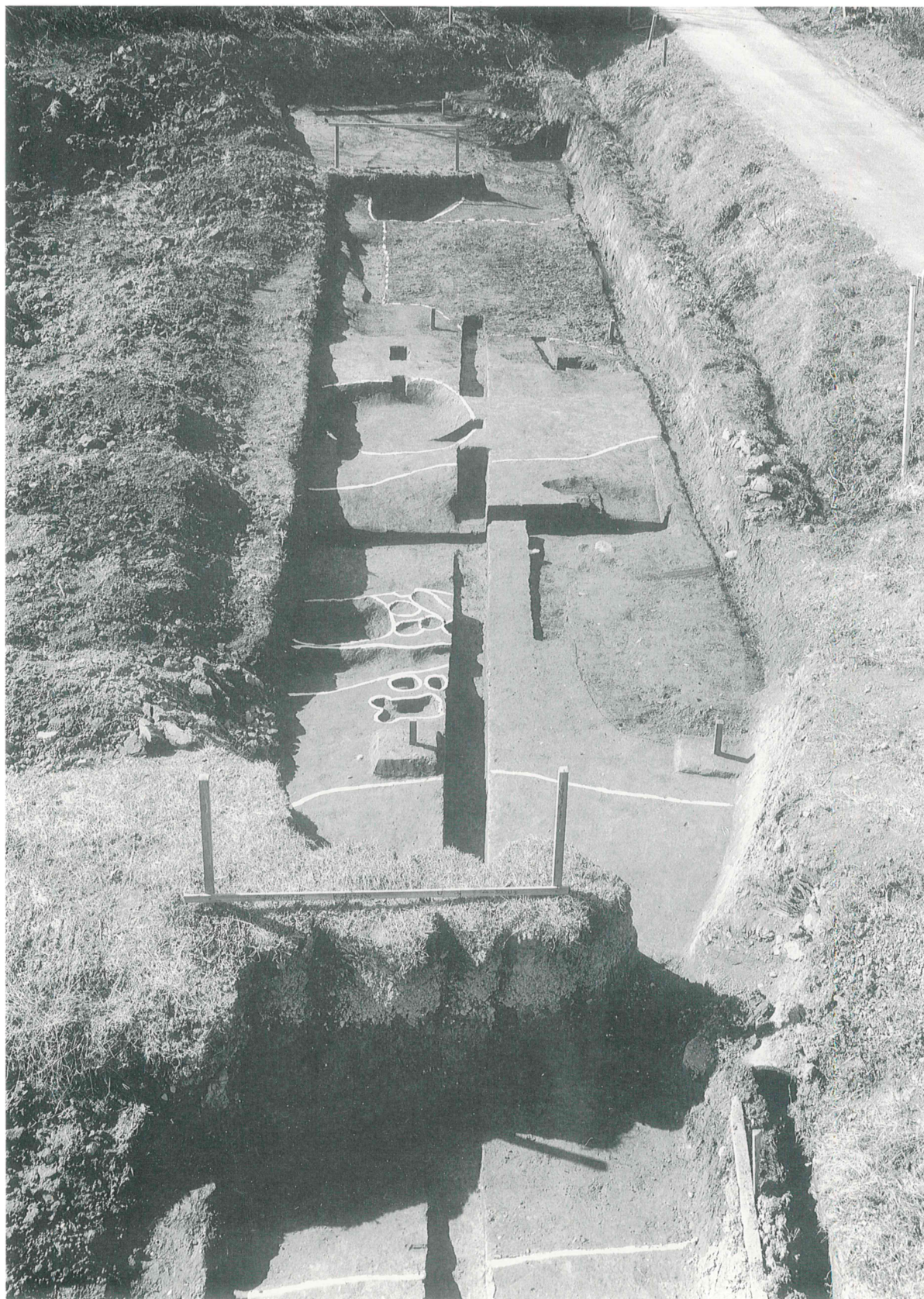
田島遺跡の遺構の広がりを見てみると、上小笠川に近い方が遺構の密集度が高い。西側の第4調査区では、水田部分は遺構が確認できなかったが、これは圃場整備によって既に遺構が消滅した可能性がある。上小笠川の旧流路がどのようになっていたかは不明であるが、「田島」という字名が示すように、遺跡の周りを取り囲む水田面よりもやや小高い土地に集落が営まれていて、川の氾濫などによる被害もさほど受けなかったと思われる。また、「塩の道」という主要な街道が通っていたことから、安定した土地だったのではないだろうか。

遺跡の立地上の点から見ると、掛川市内の遺跡との関係よりも菊川町内の上小笠川流域の遺跡や下流で合流する菊川流域の遺跡との関連を把握することが今後に残された問題である。田島遺跡では、塩の道を利用した人や物の往来があり、さらに中世には、地頭の内田氏の支配が実際に及んでいた時期もあり、流域をめぐる歴史的環境を考察するには、これらのことを無視するわけにはいかないであろう。

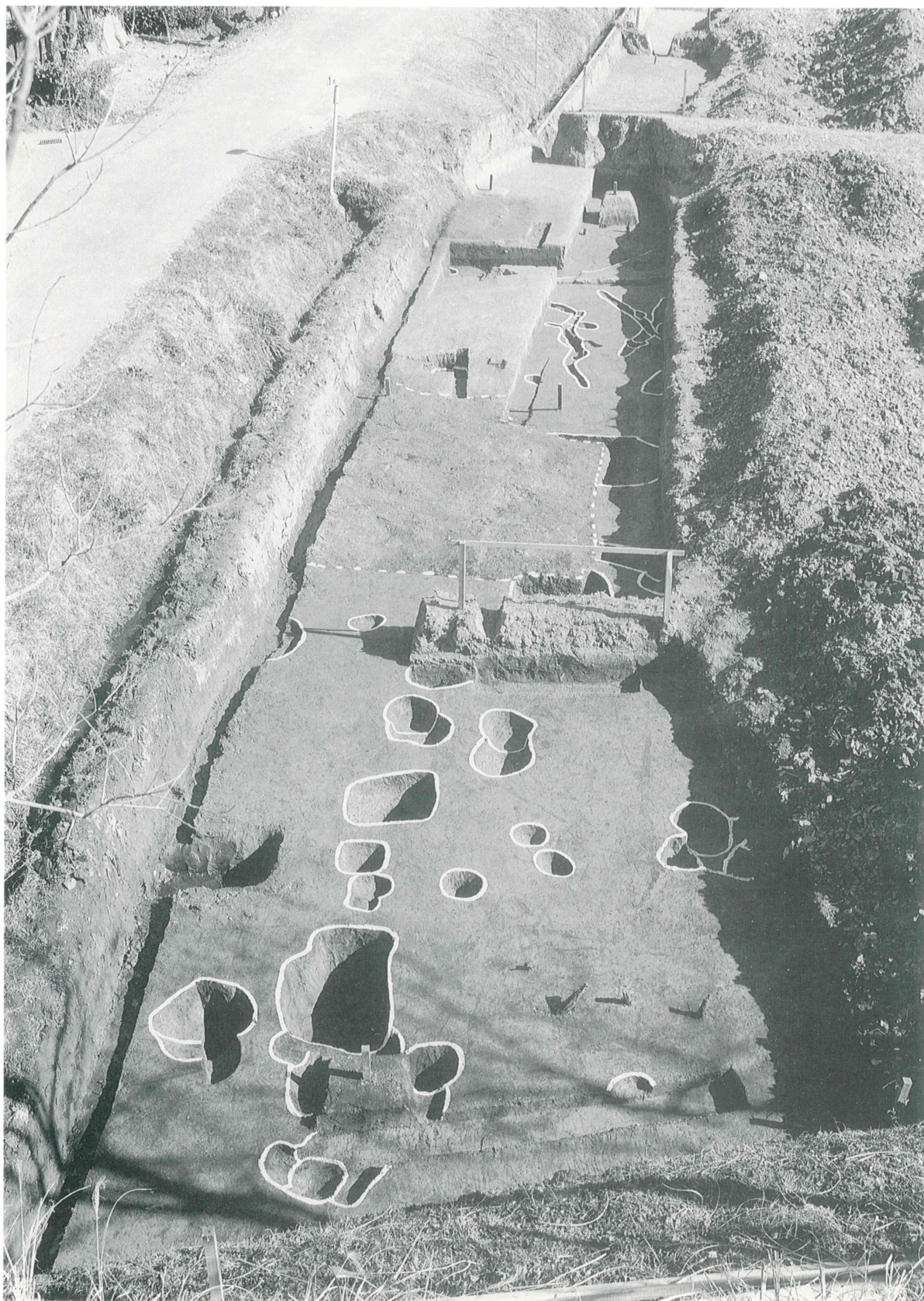
今回の調査の成果は、第4調査区のSX02から出土した縄文土器であろう。底部片で5個体確認されたが、口縁部、胴部の形態および胎土から少なくとも6個体分の土器が出土したと推察される。これらは、縄文土器中期後葉の土器群に比定される。ただ、各土器様式の特徴が混在し、明確に既定の土器様式に分類できない資料である。しかし、東三河地方に類似した土器が若干存在することから、その地方の影響を受けた在地系の土器であるといえよう。出土した土器は、遺構一括の資料であり、当該地域の縄文時代中期の土器編年を考える上で貴重な資料である。これにより、『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』の縄文時代遺跡の「上内田遺跡群」に田島遺跡も含めていだろう。

掛川市南東部地域での発掘調査を今回初めて行い、田島遺跡のほぼ全域にわたり縦横に調査した。今回の調査は、調査面積こそ少ないが、広範囲にトレンチを入れるような形になり、得られた知見は多いと言えるだろう。

図 版



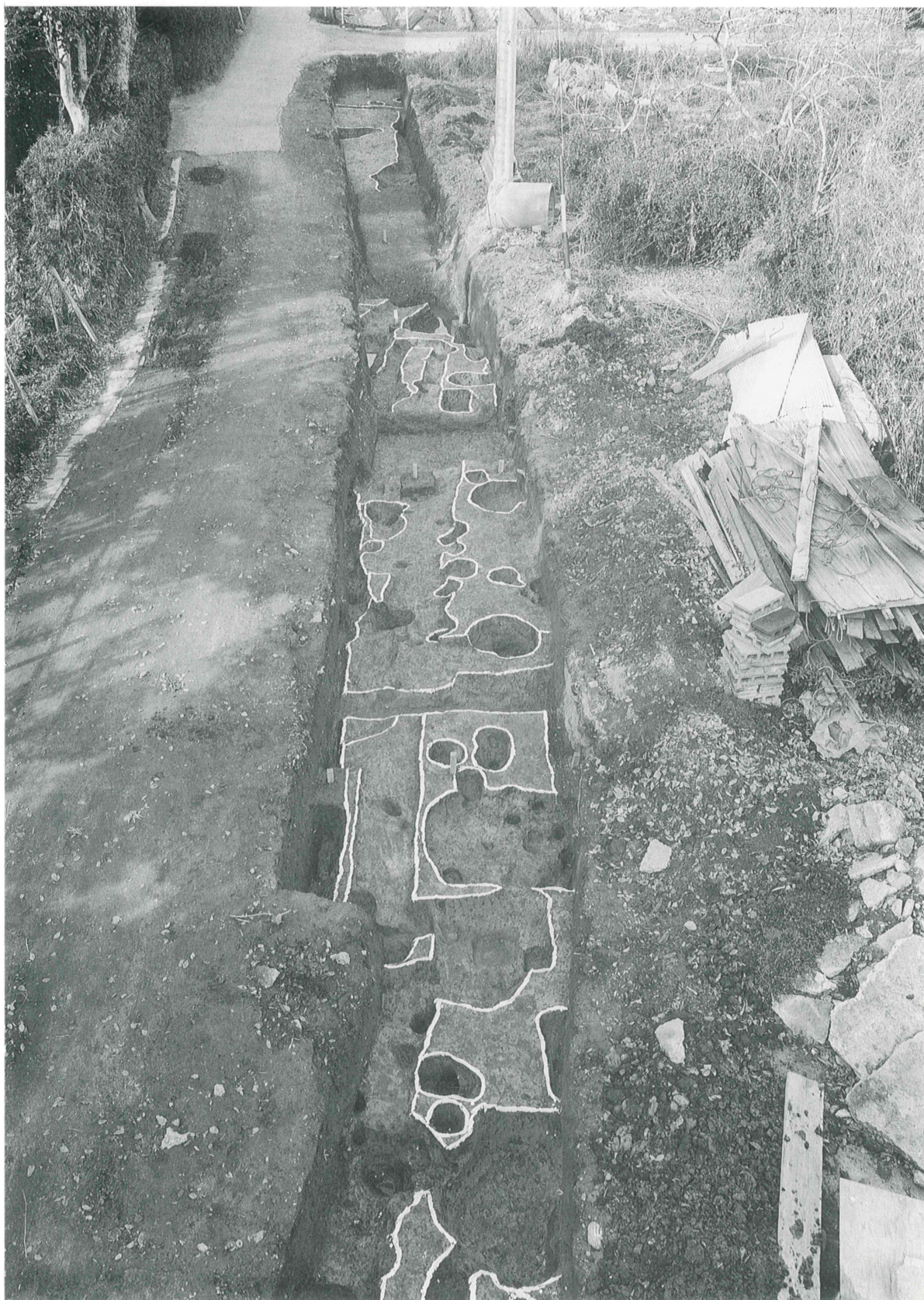
第1調査区第1面 遺構完掘状況（北東から）



第1調査区第2面 遺構完掘状況（南西から）



第2調査区 遺構完掘状況（南東から）



第3調査区 完掘状況（南東から）



第3調査区 完掘状況（南東から）



第4調査区 完掘状況（北85%東から）



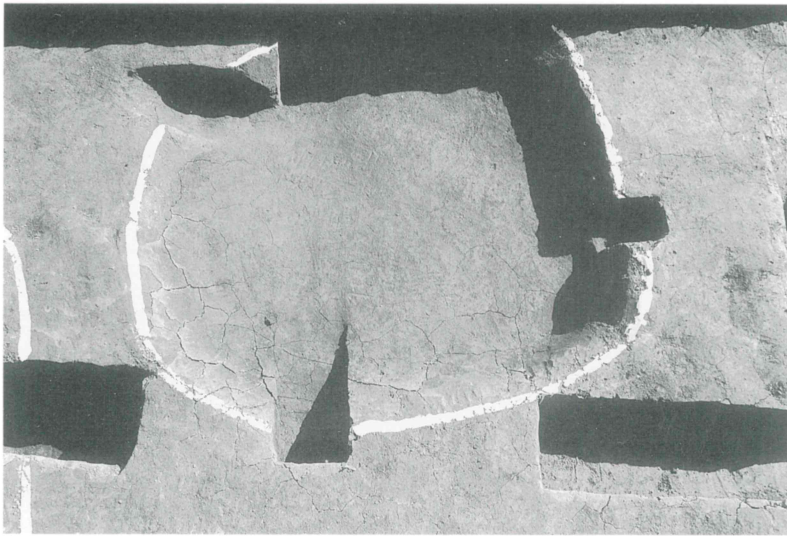
田島遺跡遠景（北西から）



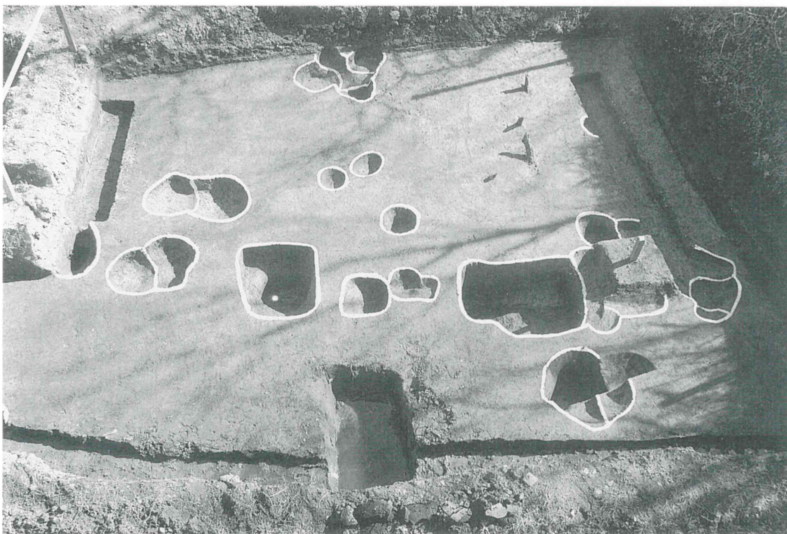
重機掘削風景（第3調査区）



作業風景（第1調査区）



第1調査区S X01 完掘状況（北西から）



第1調査区第2面ピット 完掘状況（北西から）



第2調査区ピット 完掘状況1（南西から）



第2調査区ピット 完掘状況2（南西から）



第4調査区S X02 土器出土状況（北西から）



第4調査区S X02 土器出土状況（微細）



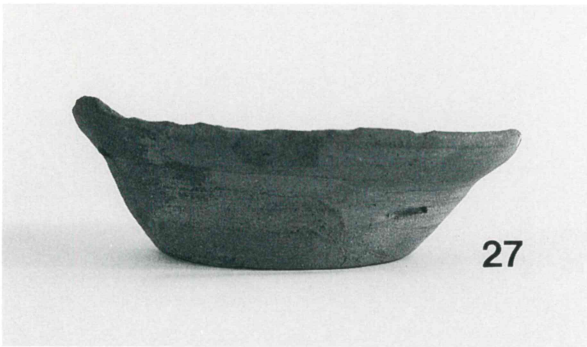
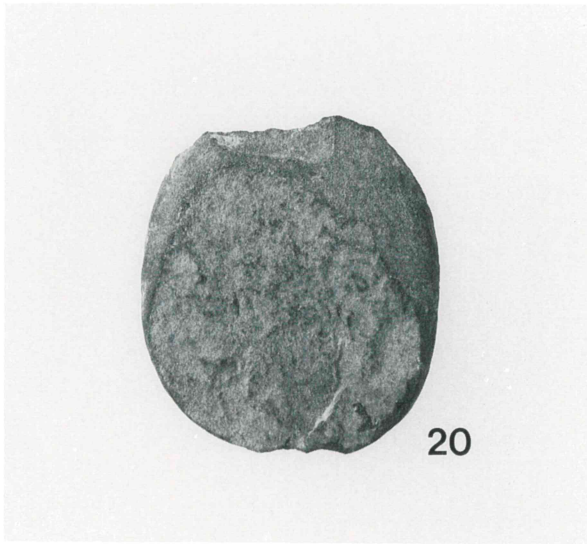
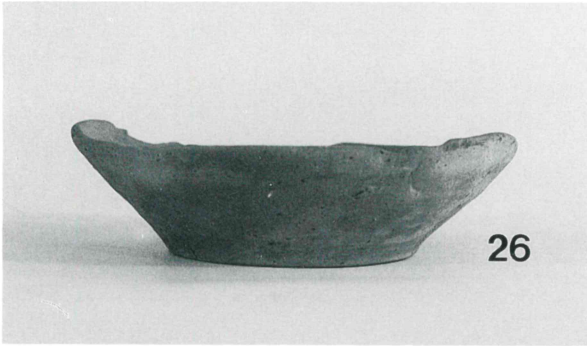
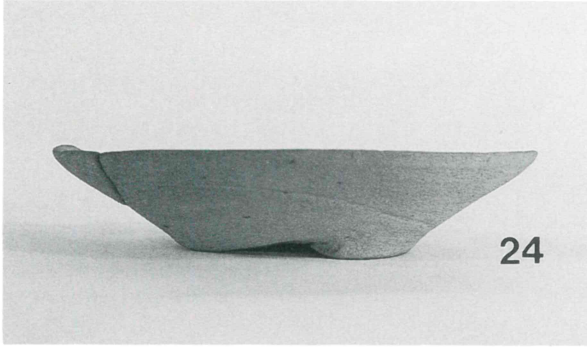
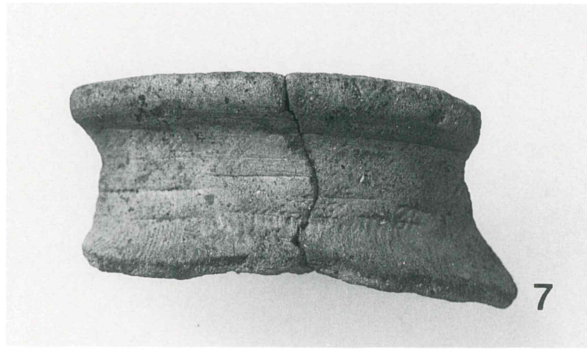
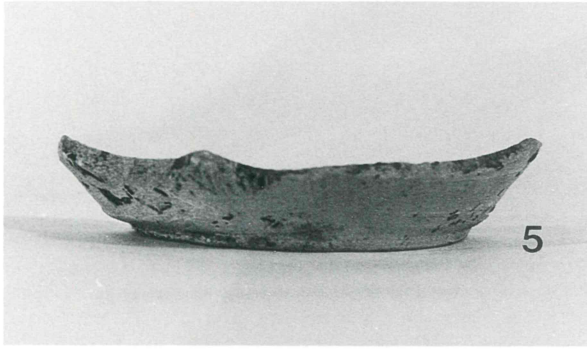
第4調査区S X03 礫出土状況（南西から）

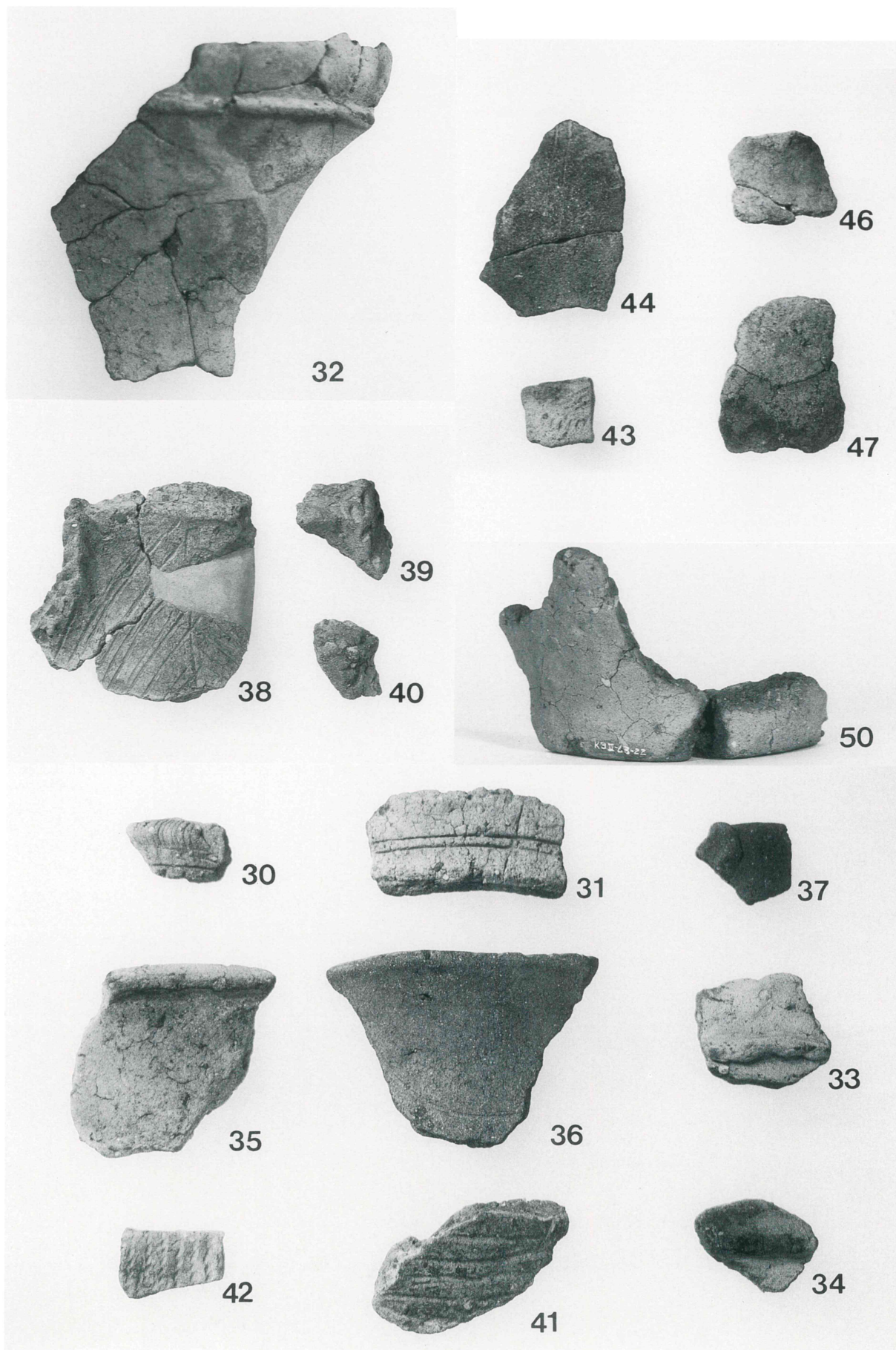


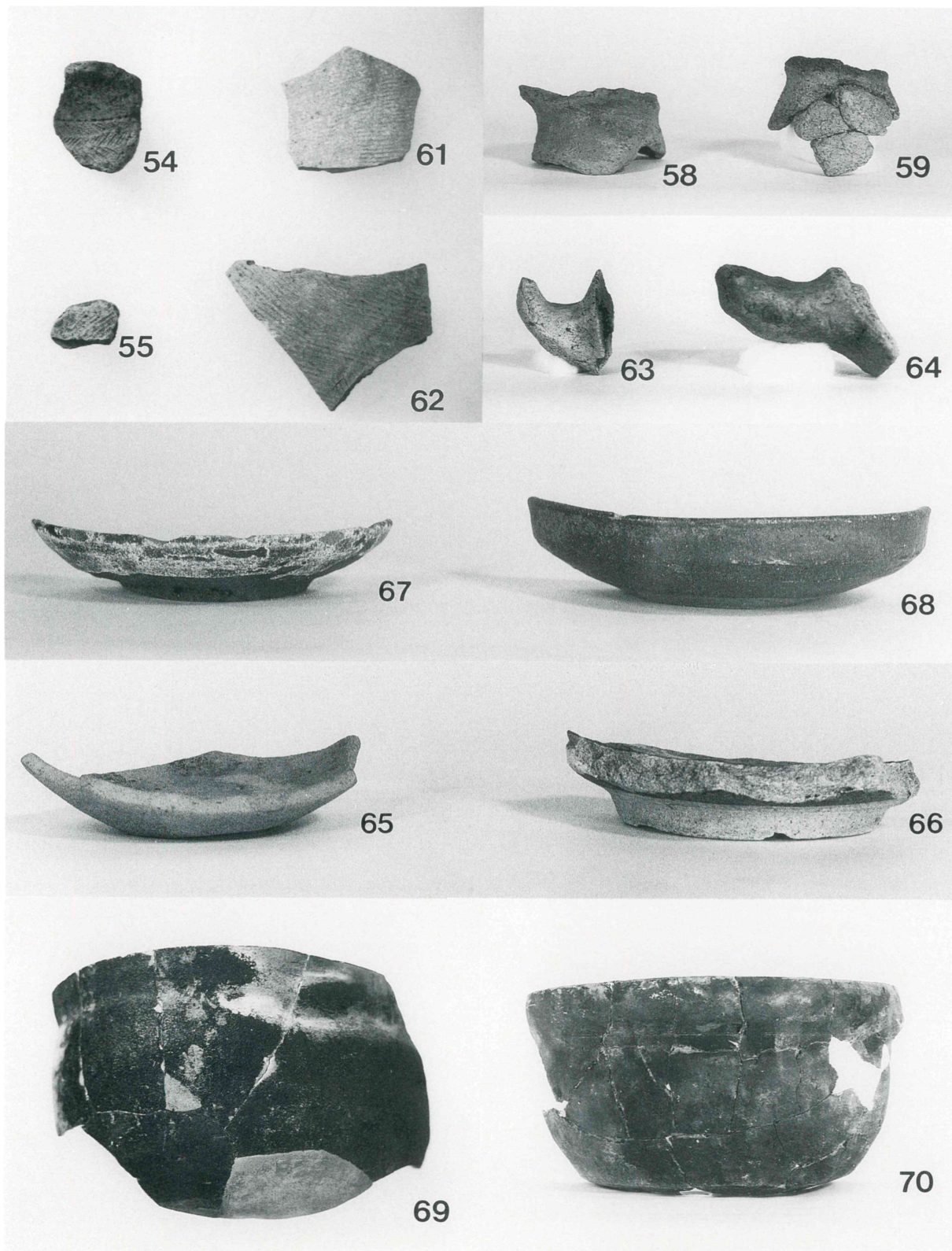
第3調査区S X05 遺物出土状況（南西から）



第3調査区S X05 遺物出土状況（微細）







報告書抄録

ふりがな	たじまいせき							
書名	田島遺跡							
副書名	市道田島桶田線道路拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告書							
編著者名	大熊茂広 村松弘規							
編集機関	掛川市教育委員会							
所在地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷701番地の1 TEL (0537) 21-1158							
発行年月日	西歴 1997年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
田島遺跡	しずおかけんかけがわし 静岡県掛川市 かみうちだあざたじま 上内田字田島	22213	3	34度 44分 25秒	138度 03分 41秒	199 〜 19970331	m ²	市道拡幅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
田島遺跡	散布地	縄文時代中期 中世	土坑	縄文土器 内耳鍋				

田 島 遺 跡

発掘調査報告書

1997年3月31日

編集発行 掛川市教育委員会
掛川市長谷701番地の1
TEL(0537)21-1158

印刷 (有) 幸 栄 印 刷
掛川市弥生町35
TEL(0537)24-4341

